

第11回専門セミナー

調査票調査 (アンケート調査) の技法を マスターする (初心者対象)

このセミナーのねらいは、受講生の方が調査票調査 (アンケート調査) の目的・特色と一連のながれを理解し、実践で応用できるスキルを身につけることです。

当日は、調査の設計、調査票の作成、実査から収集したデータの分析、そして分析結果の提示の仕方について、適宜実習を交えながら、説明を行います。さらに、調査協力者へのインフォームドコンセントやデータ管理など調査の倫理にも触れたいと思います。

調査票調査 (アンケート調査) の技法の習得は一筋縄ではいきませんが、受講生の方には、このセミナーにおいて、社会調査のむずかしさと同時に、その醍醐味・おもしろさを実感してもらえればと願っています。

- 講師** 工藤 保則^{くどう やすのり}(龍谷大学社会学部教授)
津島 昌寛^{つしま まさひろ}(龍谷大学社会学部教授)
- 日時** 2014年2月22日(土) 第1講義 10:00~12:50 第2講義 14:00~16:50
- 場所** 龍谷大学瀬田学舎6号館 地下1階 社会調査実習指導室(予定)
- 定員** 20名(先着順)、福祉フォーラム会員・REC会員 2,000円/一般 4,000円
- 申込** 福祉フォーラムの専門セミナー申込フォームからお申し込みください。
<http://rec.seta.ryukoku.ac.jp/welfare/seminar.html>
受講料の前納(指定口座への振込)が必要です。
- 問合せ** 龍谷大学福祉フォーラム事務局(REC滋賀)
〒520-2194 滋賀県大津市瀬田大江町横谷1-5
TEL 077-543-7744 FAX 077-543-7771
Email r-fukushi@ad.ryuukoku.ac.jp
受付時間 祝日及び大学が定める休日を除く月曜から金曜の9:00~16:00

お問い合わせ

龍谷大学福祉フォーラム事務局 (REC 滋賀内)
〒520-2194 滋賀県大津市瀬田大江町横谷 1-5
Tel 077-543-7744 Fax 077-543-7771
E-mail r-fukushi@ad.ryuukoku.ac.jp
ホームページ <http://rec.seta.ryukoku.ac.jp/fukushi/>

JR 琵琶湖線「瀬田」駅下車
帝産バス「龍谷大学」行き(約8分)
名神高速「瀬田西IC」(大阪方面から)
「瀬田東IC」(名古屋方面から)より
文化ゾーン方向へ車で約5分【駐車場有】
※駐車台数に限りがあります。



福祉フォーラム通信



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY

Vol.17

発行日: 2014年1月25日 発行元: 龍谷大学福祉フォーラム

第11回共生塾「子どもの貧困」

【日時】平成25年11月16日(土) 13:00~16:00

【会場】瀬田学舎 RECホール

豊かだと思われていた日本で、貧困に生活をおびやかされている多くの子どもがいることがわかってきました。今年6月に「子どもの貧困対策法」が可決され行政レベルでも対策が検討されていますが、共生塾では子どもの貧困対策に取り組んでいる実践者とともに、市民の立場から子どもの貧困について考える機会をもちました。



山田容福祉フォーラム会長のあいさつその後、「子どもの貧困防止法」の成立背景の解説を、龍谷大学社会学部准教授 土田美世子氏がオープニングとして行いました。基調講演では、NPO 法人「山科醍醐こどものひろば」前理事長、幸重社会福祉事務所代表 幸重忠孝氏から、子どもの貧困について講義を受けました。貧困が子どもの「今」の生活に影響するだけでなく、学習機会や社会経験の機会を奪うことによりその「未来」をも奪う可能性をもつことを、視聴覚を交えて具体的に学ぶことができました。

引き続き行われたシンポジウムでは、希望の児童館館長 前川修氏、NPO 法人「山科醍醐こどものひろば」事務局次長 梅原美野氏、学習支援ボランティア団体 Atlas 代表 日野貴博の3名から、それぞれの立場から子どもの貧困に向き合い実施されている活動について報告されまし

た。貧困に向き合わざるを得ない子どもたちの居場所をつくり、その気持ちに寄り添い、できる限りの支援を提供しようとする支援者の姿を通じ、子どもたちは自分が大切な存在であると感じ、自信を取り戻し、未来を探す力を身につけていくことができる…。実践の一つ一つから、地域の大人がまず子どもの存在を認め、少しずつでもその支援に加わっていくことの重要性について、考えることができました。

生まれ育った家庭が貧困であることは、子どもたちに何の責任もありません。今回の共生塾を通じて、私たち市民一人ひとりが子どもの貧困に向き合い、子どもたちの抱えるしんどさを理解し、見守り支えていくことの意義を、受講者と共有することができました。

(文責: 土田美世子 龍谷大学社会学部准教授)

福祉フォーラム2013

家族の役割・家族のこれから

【日時】平成25年11月30日(土) 13:00~16:00

【会場】龍谷大学 アバンティ響都ホール

本年度の福祉フォーラムは、「家族の役割・家族のこれから」をテーマに、11月30日に京都駅八条口アバンティにある龍谷大学響都ホールにて、約230名の参加者を得て開催されました。基調講演に前大阪大学総長で大谷大学教授の鷲田清一氏をお迎えし、シンポジウムでは、認知症、精神障害、知的障害を持つ方ご家族3名にご登壇いただきました。

このテーマは、支援する側の負担が高まる一方である日本の福祉の現実において、専門的支援者への支援の必要性もふまつつも、支援者であると同時に自らも当事者である家族の負担は限界に来ているのではないか、今後、家族はどこまでみればいいのかを考えてみたいという趣旨でした。

鷲田氏は、「いのちの世話」という言葉を用いられ、かつては個人、家族、地域社会によってなされていた人間の生の営みをケアする力が、行政サービス、消費サービスなどの形で外部化されていき、減退している現状を述べられました。一人が別の一人をケアし続けることなどではできず、家族も縮小した現在、いわば専門家にゆだねられている「いのちの世話」をする力を再生していくために、住民相互が良い意味で依存し合えるような地域社会の再構築が必要と説かれました。

続いてのシンポジウムでは、まず若年認知症者の家族(夫)である新保博氏が、ご自身が働きながら介護をされてきたご経験から、認知症者のケアにおけ

る身体的疲労にとどまらない負担やストレスについて、さらには家族会に参加したことで支えられた体験と支援を受ける側から支える側になっていくことの意味などを語られました。続いて精神障害者のご家族である野路芳雄氏は、同じハンディを抱える人たちの中でも精神障害者に考慮されない各種の現実

があること、またご自身が中心的な役割を果たされている家族会の活動にふれながら、単に要求活動体としてではなく、よりよい社会づくりに向けた発信、提言をふまえた活動をしていることを伝えられました。最後に知的障害者の母親である町田俊子氏は、お子さんの幼少期から、学齢期、就労、そして自立にいたる過程でのそれぞれの時期に出会われた問題、そしてそれを関係者とともにどのように越えられてこられたかについて、ときにすさまじいとも感じられる現実のエピソードをもとにお話しいただきました。

それぞれに深い葛藤を体験されてきた方々のお話であり、当事者ならではのリアリティが伝わってくる内容でしたが、新保氏、野路氏のお話からは家族会などの当事者組織の意義、町田氏のお話からは、関わったソーシャルワーカーの果たした役割に特に強い

印象が残りました。

貴重なお話を伺う中で、家族には他者にはできない役割があるものの、やはり家族が単独で抱えることができない現実があることを再認識しました。さらに家族と社会との関係は、社会から家族へと一方的な支援が提供されるだけではなく、家族の思いが支援や社会に反映されることで社会の側が変化し、それがまた家族、当事者に還元されていくといった、両者の協働性と意識とエネルギーの循環が大切であることにも気づかされました。このような循環こそ、鷲田氏が述べられた地域社会のあり方を実現する方途になっていくのではないのでしょうか。

そのためには、まず家族の現実や思いを共有することがすべての原点であり、今回のような機会を持ち続けることも重要であるかと思います。家族は苦悩を抱えるだけではなく、積年の関わりから数多くの洞察や工夫、知恵を数多く蓄積されており、支援者はまず家族から学ぶべきであるといえるでしょう。行政や地域社会は、家族の訴えに耳を傾け、家族から学び、自らを変化させていける柔軟な組織体であることが問われています。

(文責:山田 容 龍谷大学福祉フォーラム会長
龍谷大学社会学部准教授)

